

ボリバル革命への破壊工作に対し民衆結束 ベネズエラクーデターから13年

Z.C.ダトカ(ベネズエラ情勢ウォッチャー)
レイチエル・ブースロイド(ラ米ウォッチャー)

キューバと米国が国交正常化へ動く中、ワシントンのベネズエラへの体制転換工作は一段と激しさを増している。国際情勢に多少通じた者なら今日の人為的な原油価格の急落が米国とサウジアラビアの謀略であり、その矛先がベネズエラやロシア、イランなどに向けられていることは容易に看破できる。この事実を等閑視して、米英を中心とする西側主流メディアは石油輸出が国の屋台骨を支えるベネズエラの深刻化する経済危機をマドゥーロ政権の失策として冷笑し、その対米非難とボリバル革命急進化の動きを的外れと揶揄している。対談形式をとる本稿は2002年のクーデターを3日間で挫折させたベネズエラの民衆パワーが政変を機にさらに統合され、これを支える民主的なメディアが質、量ともに増強されたと指摘。「カラー革命」へと形を変えての米国的新たな体制転換の目論みは進化したベネズエラ社会の力の前に頓挫すると予告する。(編集部)

原題:4月11日ベネズエラ:2002年クーデターから2015年経済戦争へ

■2002年クーデターとベネズエラの現況を語る

2002年4月11日、米政府に支援されたベネズエラの右派反政府勢力はクーデターに着手した。民主的な選挙を通じて就任したチャベス大統領を強制的に大統領府から連行して誘拐し、代わってベネズエラの企業連合「フェデカラマラス」のペドロ・カルモナ会長を暫定大統領にした。クーデターの首謀者らは、憲法を破棄し、すべての政府機関を解散させた。憲法に忠実な軍部やベネズエラ人市民の大規模な抗議が4月13日にチャベスを大統領の座に復帰させ、クーデターは挫折した。



ベネビジョンによる世論搅乱(かくらん)工作の代表的映像として有名になったルナグナ陸橋での大統領支持派が抗議の民衆に向けて発砲しているとされた場面。この映像によって、大統領支持率が一気に下落、クーデター派に追い風となった。事実は、誰もいない大通りの向こうから発砲していたクーデター派の狙撃手に反撃していた。(編集部)

今日、ベネズエラ政府はボリバル革命に対し仕掛けられた多面的な戦いが存在すると主張している。企業経営者や富裕

層による経済サボタージュ、ベネズエラの民間メディアによる心理戦、4ヶ月もの長きにわたり43人の死者を出した「ガリンバス」と呼ばれる暴力による街路封鎖がそれだ。

テレスール放送局(teleSUR)は、ベネズエラ情勢分析の専門家であるベネズエラに拠点を置く活動家、Z.C.ダトカ(Z.C. Dutka)とレイチエル・ブースロイド(Rachael Boothroyd)の2人に2002年4月11日から同13日にかけてのクーデターと現在のベネズエラ情勢との繋がりについて話を聞いた。

ダトカは2008年からベネズエラで暮らしている。ブースロイドはカラカスに住みながら、ベネズエラ国家の覇権と変革をテーマに英リバプール大学の博士号取得にも取り組んでいる。

■「カラー革命」工作になりふり構わず

TeleSUR(以下Teleと略): 短命だった2002年クーデターは反政府勢力と米国に搖さぶられるベネズエラの現状にどのような影を落としているか?

ダトカ(以下Dと略): 2002年のクーデターはほとんどの人が分かっていたことが突出した事例だった。つまり、米政府の支援を受けたベネズエラの反政府勢力はベネズエラの政治を新自由主義(ネオリバ)へと復帰させるために手段を選ばなかったということである。クーデターがあのように完全に失敗してしまって以来、彼らは「一連のカラー革命」とさらに緊密に連携した破壊工作に焦点を当てて動いている。企業やソーシャルメディアを介したキャンペーン、偽の非政府組織(NGOs)、経済的破壊工作がそれである。

■既得権益奪回目指すエスタブリッシュメント

ブースロイド(以下Bと略): 2002年のクーデターは反政府勢力が民主的に政権を掌握するのを待ち切れず、我慢できずに起こしたものだ。彼らは通常の選挙を通じて権力を奪取すること、チャベスが1999年から2001年の間に成立させた一連の法律の効力を無効にするのはほとんど不可能と判断したためだ。

一連の法律はベネズエラのエリート層がベネズエラの経済とその政治システムを巡り歴史的に用いてきた牙城を根底から揺るがした。特に2001年の石油法の改正は、外国企業との契約を管理する任務を負い、基本的に経営実体になっていた国営石油会社・ペトロレオス(略称PDVSA)からベネズエラ政府が経営権を奪還するための道を開いた。

これらの法律はベネズエラの革命がうわべだけの政治体制の見直しを超えたものであるとのメッセージを反政府勢力に送った。また一連の法律は、国際通貨基金(IMF)や世界銀行のような国際金融機関に対し、ベネズエラは経済体制に関しては主権国家として独立の道を歩む、とのメッセージを送った。

想像できると思うが、(2002年クーデターから)13年経ても、野党・反政府勢力とワシントンの苛立ちは治まらない。反対勢力は(2007年の憲法案の是非を問う国民投票での僅差の勝利という特殊な例を除けば、)1998年以降、国内選挙に事実上すべて敗北したが、ベネズエラの革命は2013年のチャベスの死を契機に破綻するとの予測は当たらなかつた。

■絶望感が野党勢力を分断

この絶望感が現在、沸点に達している。昨年、選挙でのマドゥーロ大統領の勝利、ベネズエラ政府に対して仕掛けられた多数のテロリストや民兵組織の企みに続いて、ついに暴動が発生した。

絶望感が反政府勢力を分断し、まとまりをなくさせた。彼らには明確な政治プログラムはない。2015年2月11日に公表された野党を率いるマリア・コリーナ・マチャド、レオポルド・ロペス、アントニオ・レデズマによって起草された国家体制移行合意の声明文を読めば、ベネズエラを巡る現況と2002年クーデターとの連続性はおそらく最も鮮明に浮き彫りになる。この2月、ならず者の空軍幹部らがマドゥーロ大統領率いる現政権へのクーデターを企てようと計画していたちょうど1日前に彼らの声明は公表された。

■米国と繋がり「人権侵害」を非難——変わらぬ手口

起草された合意文書に盛り込まれた言葉と意図は「ポストチャバースの計画」を描いた「民主的合意草案」に使われたものとほぼ間違いない同じものだ。それは2002年のクーデターのちょうど1か月前に発表されていた。

ベネズエラ労働者連盟(CTV)のカルロス・オルテガ議長と(クーデター発生から47時間後に権力を握った違法な政府の暫定大統領に就任した)ベネズエラ企業連盟「フェデカマラス」のペドロ・カルモナ会長によって署名された、「民主的合意草案」の文書は、2015年の「国家移行合意」文書とほぼ同じ書き方で、チャバース政権が「断末魔に苦しんでいる」と記している。2つの文書ともにベネズエラ政府を人権侵害で非難している。

2002年以降変更されていないもう一つの要素は反政府勢力が米国と明確に繋がっていることだ。これはベネズエラの内部に刺さった大きな棘(とげ)であり、ベネズエラ国民が政治的

に十分な前進を遂げるのを妨げている要因だ。

2002年クーデターの際、米政府は、資金援助を行ったこと、クーデターの指導者や関係組織と接触していたことを認めた。この策動はその後も続けられ、オバマ政権下で反政府勢力への資金提供は増加した。今年は、米国民主主義基金(NED)や米国務省傘下の米国国際開発庁(USAID)は、ベネズエラの反政府勢力の「ユース(youth)」や「シビルソサイエティー(civil society)」といった団体・組織への援助予算を増やしている。

これはもちろん1999年に始まったベネズエラ政府に対して継続的に企てられ、考えられ得るすべての手段を介して進められているクーデターの一過程なのだ。手口について幾つか例を挙げると、経済的な“絞殺”、街頭での暴力行為、軍事的な陰謀…がある。

■メディアの影響力さまざま

しかし、おそらく2002年のクーデターを最も適切に定義し、そして世界中で最も影響を与えたのは、クーデターを支援し、それを扇動したメディアの役割だった。

メディアは意図的に画像を操作し、本当に起きていることをニュースとして放送することを拒否した。街路では、数十万人がチャバースの大統領復帰を求めて、ベネズエラの大統領府を包囲したが、ベネズエラのテレビの画面に現れたのは漫画(アニメ)だけだった。本物の情報を一般の人々になんとか伝えたのはコミュニティメディアや地上通信を介してだった。

メディア王で、ベネズエラ最大の民間テレビ局・ベネビジョン(Venevision)のオーナー、グスタボ・シスネロスはクーデターの首謀者らと発生前と鎮圧後に会ったと伝えられている。この放送局・ベネビジョンは、チャバース政権が民主的に権限を付託されたことを非合法とみなす口実として一役買ったルナグナ橋の映像を操作することで多分最も重要な役割を果たした。



2002年のクーデターでは、全てのテレビ局と主要紙がクーデター派と一体となって、辞任していない“チャバース大統領の辞任”を一斉に伝え、正体不明のスナイパーによる狙撃を政府治安部隊による無差別発砲と報道する情報搅乱工作を担った(編集部)

■姿を現したクリントン、オバマ

今日、国営メディアやコミュニティメディアが着実に拡大しているにもかかわらず、報道機関は反政府勢力が利用できる最も強力な道具の1つであり続けている。ベネビジョンは依然放送している。実際、今年の3月には、ヒラリー・クリントンがオバマ政権の国務長官に在任中に、シスネロスが「ビル・ヒラリー・チェルシー・クリントン財団」に100万ドルほどを寄付したこと

が明らかになった。

以上のような理由から、これら反政府勢力は歴史的にジョージ・ブッシュからヒラリー・クリントンやバラク・オバマ、そしてグスタボ・シスネロスやベネズエラの古くからの政治エリートと繋がり続けている。ベネズエラ野党の最も新しい顔であるマリア・コリーナ・マチャドからエンリケ・カプリレス・ラドンスキーやレオポルド・ロペスさえもがこの政治エリート層に属しており、

彼ら全員がベネズエラのビジネスエリートに属する一族の出身である。



2012年10月にチャベスが勝利した、カプリレスとチャベスの間で争われたベネズエラ大統領選でかつてのクーデターで果たしたカプリレスの役割を人々に想起させるプラカードを女性が掲げている。(EFE)

■再度のクーデターは克服可能か？

Tele2: ベネズエラでは、(4月11日に発生した)クーデターが4月13日に撃退された記念日に、あらゆる攻撃はそれを上回る強い抵抗に遭遇することを意味する「あらゆる11には13がある」と人々は大声で繰り返し唱える。このことはあなたがた2人にとってベネズエラの現状に鑑みると何を意味するだろうか？

D: 4月11日はクーデターが行われた日。恐怖と混乱の日だった。4月12日にそれは憤りと大衆運動となった。4月13日までは、ベネズエラの人々は自分たちが選んだ大統領を復帰させた。威嚇に抗い、自分たちの力を統合された多数派と認識すれば自分たちに出来ることがあるとの格言がヒントを与えていた。「すべての11には13がある」は、「彼らが我々を弾圧する度に、我々はさらに強く立ち上がる」ことを意味する。バラク・オバマでさえベネズエラ国民が自ら決定することを学んだ。1000万人がオバマの大統領令の執行に反対する嘆願書に署名した。この数はベネズエラ国民の3分の1に該当する。

B: 新たな「権力の座にとどまったくラテンアメリカ」という定義の特徴の1つは、政府と国民との間の弁証法的な相乗効果である。この意味では、2002年のクーデターは絶対的に超越的だった。なぜならそれは統合された相乗効果、そして右翼と帝

国主義の攻撃に直面して反論の余地のない「大衆の力」をデモンストレーションしたからである。

「すべての11には13がある」。このフレーズは、革命の口承と歴史において民衆パワーがほとばしり出た重要性を物語っている。また、ベネズエラ人の革命的集団意識における際立つて力強い歴史的な拠り所とシンボルとなっている。

■悲観と恐怖は克服された

だが悲しむべきことに、昨年、ベネズエラ政府に対して、まったく終りのみえない攻撃が行われたため、活動家の多くが私に対し、個人的に「もう1つの11が現れたら、13は出てこない」と打ち明けた。

私は反政府勢力の暴力によるバリケード構築と今年の米国の制裁と大統領令への対応がこの恐怖を払拭したと見ていく。ベネズエラの人々は、どんなに疲れても、常に帝国主義と反動政治と戦う準備ができていることを繰り返し証明する。ベネズエラの人々を一貫して定義できる事柄を1つ挙げるならば、それは民主主義体制を堅持し、外国の介入を拒絶することに献身することだ。

結局のところ、「すべての11には13がある」との文言の根源には、革命と反動の弁証法と政府と国民の相乗効果という双方の点において、革命にはサイクルがあるとの意味がある。右派が前進していると思われる時があるが、最終的に、力のバランスで優位に立つのは民衆パワーである。少なくとも、この文言のロジックに従えば、歴史がここ15年間どう展開したかを示している。

■国際支援求め続けるクーデター首謀者ら

Tele3: 2002年クーデターに関与した人や軍人は今どこにいるのか？

D: チャベス大統領は、(ベネズエラ企業連盟「フェデカラマス」会長から大統領に就任した)ペドロ・カルモナの暫定統治中に議会を解体し、市民の自由を停止したいわゆるカルモナ布告に署名した連中を亡命させたり、収監したりはしなかった。(「人民の意志」党リーダーで右派の指導者として2002年4月のクーデターに参加した)レオポルド・ロペスは、明らかな国家反逆罪に加え、身柄拘束された駐ベネズエラ・キューバ大使を足蹠にしているのを映像に収められている。(当時の)カラカス市長アントニオ・レデズマは警察や軍の手によってベネズエラ人約3000人が虐殺された1989年のカラカゾ虐殺に責任を負っている。

今日、ロペスとレデズマは収監中だ。一方、マリア・リーナ・マチャドはベネズエラとパナマの裁判所で審理を受けている。3人の中には司法当局の措置をそれなりに考慮している者もいるが、実際のところは、布告に署名した多くの他の連中とともに、この3人は有力なソーシャルメディアに登場し続け、自身をいわゆる自由の戦士として国際的な注目をさらに集めている。彼らは注意深く自分の切り札を利用している。ロペスは少なくとも3回の公判をサボタージュしているが、彼の妻リリアン・ティントリは現在、国際ツアーや世界の指導者に支援を求めている。

B: この3人の主要人物とは別に、カルモナなどその他のクーデター首謀者は、米国とその同盟国に守られて、コロンビアやマイアミのような国外の地に住んでいる。

■背後で蠢く欧米諸国

だがしかし、これらの連中は、破壊活動を除いては、国内政治あるいはベネズエラ国民に大きな影響力を有していないと言つてもいいだろう。(チャベスの死を受け2013年大統領選に



「すべての11には13がある」が2002年のクーデター以来、ベネズエラ民衆の抵抗の合言葉になっている(編集部)

出馬し、僅差で落選した)カプリエスは恐らくこの中では例外的な存在だ。破壊活動にほとんど関与しなかったものの、2013年の選挙ではなんとか49%の得票率を獲得した。彼の人気はやや衰えたように見えるのだが…。

にもかかわらず、野党・反政府勢力の政治的な演説や行動のほとんどが、実際のところ、米国や欧州諸国といった国外メディアで実施されるように仕組まれている。これらの輩(やから)は、基本的に国外放送局から出演料を得ている。海外報道機関での発言は国際メディアに注目されるのを狙っているため、自由主義的、資本主義的、政治的な諸団体や「人権」組織によって確立された審美的、言語的、さらに「モラル」上の規範に従っている。



2012年4月13日のチャベス大統領(La Republica撮影)

■民衆の覚醒とこれを支えるメディア

Tele4: 2002年クーデターはベネズエラの政治にどんな影響を与えて続けているか?

D: クーデターは社会運動に参加したことのなかった大部分の国民を政治化するのによく成功したベネズエラの自己決定を損ねようとする卑劣な試みだった。ベネズエラの若者は政治的なサークルや団体を組織し、学生は恵まれない人々に読み書きを教えようと一齊に志願した。母親たちは地域の諸組織や政党の支部に参加し、2002年のクーデター後の選挙の投票率は世界の歴史の中で最高水準となった。

クーデターを契機にこれに報復しようとする民間報道機関が脚光を浴び、反政府勢力を率いる実業界の大物によって封殺されることのなかった情報サービス分野の必要性を人々に認識させた。コミュニティ系のラジオ局がベネズエラ各地に急増する一方、アビラテレビのような国営放送局が本物の大衆文化を“主役”にしようと目指すアーティストや映画制作者の人たちを支援した。

またそれ以来今日まで、萌芽期にある革命の動向を緻密に観察し続けている世界中の連帯グループの注目を引きだした。ベネズエラアナリシス(Venezuelanalysis)の英語版ニュースサイトがベネズエラに関するひどい国際報道と現実とのギャップを埋めるため首都カラカスに設けられた。

■2002年を機に民衆パワーを統合

B: 2002年4月13日の重要性の過大評価はできない。私の見るところ、あのクーデターは、とりわけチャベスが革命のプロセスの将来を保証する上で民衆パワーの中心的な役割を認識した時が決定的な瞬間だった。

この時から現在まで、共同協議会、コムユーン、コミュニティメ

ディアといったさまざまな組織を通じて民衆パワーを「制度化」し、統合するために、現政権は具体的な試み実行してきた。また同時に、国の資源を連結させ、国の機能を彼らに委任することにより、民衆の表現力の強化に努めており、一定程度の成功を収めた。

この意味で、2002年のクーデターはボリバル主義に基づくプロジェクトの創出と政治志向のための跳躍台となった。とりわけ、国の経済政治構造の民主化の必要性、ベネズエラという国を革命的な移行期の只中にあると確認するという2つの観点から、急進的民主主義に焦点を当てた。

ダトカが説明したが、粗末な報道機材で“武装”し、真実の情報を伝える唯一の発信源となった多数のコミュニティメディア集団がそうだったように、(ニュースサイト)ベネズエラアナリシス(Venezuelanalysis)もこの反動勢力の攻勢やメディアの報道管制を機に生まれたのだ。

ベネズエラアナリシスの創設者、グレゴリー・ウィルパートはクーデターが展開していた時、ベネズエラにいた。これが翌年にベネズエラアナリシスを創設しようとする第一のインスピレーションとなつた。その目的は、企業メディアによって作り上げられた報道の霸権に異議申し立て可能な情報の提供とベネズエラの地で起きていることを国民により詳しく伝えることにある。



■ベネズエラはさらに進化—結論

結論として言えば、2002年のクーデターはボリバル革命における「市民と軍の同盟」という思想を確立した瞬間でもあつたのだ。大統領府を奪回し、クーデター首謀者を逮捕するために行動を起こしたのが大統領警備隊の労働者階級出身兵士だったのは当然のことだった。

(これに関する評価は分かれていますが、)中には彼らの役割が見過ごされていると主張する者がいる一方、(チャベス政権打倒を唱える反政府側の)群衆による大統領府の外門の攻撃という圧力にさらされなければ彼らが行動を起こすことは決してなかったと主張する人がいる。しかしながら、1つだけ確実なことがある。それはこのような弁証法的な相互作用がなければ、ベネズエラは今日、非常に異なる政治体験をしているということだ。

翻訳: 加治康男(独立ジャーナリスト)

原文: 2015年4月11日付telesurtv.net

Venezuela on April 11: 2002 Coup to 2015 Economic War

<http://www.telesurtv.net/english/analysis/Venezuela-on-April-11-2002-Coup-to-2015-Economic-War-20150411-0007.html>